

昭和43年7月1日第3種郵便物認可  
平成21年1月5日発行(毎月5日1回発行)  
第49巻1月号(通巻504号)

# 風土



時雨虹  
神蔵器

満天の星近づきて桂郎忌

うしろより闇のぞきけり牡丹焚く

ふるさとは兄嫁ひとり時雨虹

くわりんの実桂郎ならば打ち落す

はつらつと葱二タ畝や一の門

威 銃 天 皇 陵 へ と ど ろ け り  
短 日 の 顔 よ り 暮 る る 香 時 計  
秋 冷 の 京 の 三 日 を 土 産 と す  
忌 や 一 つ 十 一 月 の う す み ど り  
大 根 引 く 音 の 奈 落 を 聞 き 澄 ま す  
大 根 引 く わ れ に の こ り し 旅 一 つ  
い ま と い ふ は る か な る も の 冬 椿



# 竹間集

同人作品



釣瓶落し

宮川みね子

遺髪塚鴟の火の声落しけり  
大石と四十六士に来る小鳥たち  
神の旅染井の水のうまきかな  
去ぬ燕疏水に沿ひて遡る  
木の実落つ青空へ音返しつつ  
割れさうな京の青空くわりんの実  
椎の実をかみゐて釣瓶落しかな

さくらたで

浜 福恵

風澄むや鶉の瀬を稚魚の群れなせり  
比丘尼屋敷址の日の原みのこづち  
京遠し根来は嶮し鴟の贄  
鯖雲や田に青鷺の居残れる  
猿梨さるなしや日和の山の観世音  
島淡路にてに野の起伏なだらか藁ぼつち  
一年忌近し行子のさくらたで

旅の途中、湘本に旧友小倉行子と金吾ぶも  
行子とんは昨秋すでに他界

青柳寺

鈴木とおる

吾がための位牌の余白夜の秋  
常口を誰か来るらし秋の暮  
飯食うてよりの一入の夜長かな  
白桃をすする安達太良雲の湧き  
ぬかづけば桂郎居士や秋の声  
扁額に午後の日回る菊日和  
句碑の臍落葉しぐれの中にかな

十夜寺 外川 玲子

蓑笠落柿合のうしろひろがる柿の空  
正座して足裏の白き秋の風  
十三夜ことばえらびて歩みけり  
筆ひぢりき策のひとすぢ高し十夜寺  
傷心悼む 伊藤白潮先生の川月かげの至りけり  
水見えて水草紅葉とゆく雲と  
芭蕉忌へ月光すでに傾けり

林檎の木 山田 暢子

過去へ発つ「あづさ七号」枯野まで  
あてもなき旅ころ柿の里歩く  
ぶだう栗林寺棚枯れ安らぎの風景画  
冬麗栗林寺の天を掲げて四脚門  
落葉降る山本勘助不動尊  
敗荷に日差しあふるる午前午後  
青空や実を挽がれたる林檎の木

櫨紅葉 門伝 史会

櫨紅葉水が水押す疎水かな  
すめらぎは漏刻の祖や鳥渡る  
秋しぐれ義士祭近き遺髪塚  
紫式部渡りしあたり桐一葉  
源氏庭深みゆく秋惜しみけり  
式部の実時空を超えし大口マン  
黄落や蛤御門近く泊つ

「淡交」以後(一) 野沢しの武

槻若葉朝の宮司の常着なる  
栗若葉吾に戦時の少年期  
声のしてゐるは草取女の着きし  
立ち泳ぐ旧軍港を遠く見て  
作務僧の一人が若し白菖蒲  
甚平や老いの自適といふも虚し  
老懶を忘れ尺蠖見てゐたり



# 山河集

同人作品



神蔵器選

衣被芭蕉につづく末座にて

浅田光代

行く秋の大石主税の机かな  
秋の蚊を払ひて大石遺髪塚  
市もみぢ桜もみぢと疏水かな  
椎の実の建礼門の前に落つ

九つの門の位階や御所紅葉

下山田美江

柏楨の一面一木鯛雲  
秋蝶や蹴鞠の庭に影落す  
月茸や小町の塚の千の文  
吸ひ出しの本舗通りや雁渡し

近づきて茸ダンスや御所の庭  
眼前の蛇穴に入る御陵かな  
枯れに入る呉竹清涼殿の前

安永圭子

秋澄めり父の手跡の自伝かな  
晩秋の茶毘所に母の車椅子

残る菊括りて菊の香をまとふ

生田恵美子

敗荷に来てランナーの息づかひ  
かなしみの戸戸に違へて鴉の声  
小鳥来る赤き硝子の砂糖壺  
敗荷に敗者復活ならずあり

僧一人落葉の村を通りけり

近藤幸三郎

小鳥来る鱗鱗の顔は柵の外  
バラソルの揺れては進む稲刈機  
行く秋や時を忘れし置時計  
久里浜の出船待つ間のレモンティー

風土賞作品

## 五月来る

浅田光代

薄氷や生れたてなる風通り  
あはうみは草の色して初諸子  
陽炎につかまり立ちの赤子かな  
くるぶしのひかり出したる御身拭  
五月来る樹と樹のどこか触れ合つて  
明易や母は机を持たざりし  
それぞれの舟屋それぞれに夏つばめ  
検診車蟬の大樹に横づけし



---

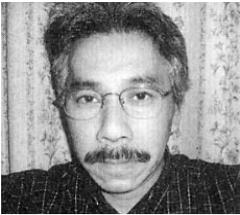
峰雲や一人に一本づつの水  
僧兵の駆け下りし径夏蓬  
捕虫網新幹線の中通る  
まつ白な地軸となりて那智の滝  
秋風や明恵上人耳落とす  
鬼の子も吹かれてゐるや十団子  
冬桜拝殿下にブーッ折れ  
母の忌の綿虫はてのひらが好き  
海鼠噛む原初の顔のありにけり  
一葉の頭痛親しき十二月  
冬すみれ初心の色に咲いてをり  
炭をつぎ鬼待つ左京消防団

新人賞作品

## アカペラ

北島和装

武相荘出でて白シャツ次郎かな  
川海老の腸透きとほる秋彼岸  
捨て舟に砂の積もりて石路は黄に  
ストリップパーの毛糸帽より猫の声  
朱鷺色に染まる東雲初筑波  
ほがらかな手から授かる初みくじ  
血圧計腕を締めあぐ霜の朝  
東京の雪やとつぴんぱらりのふ



---

銭湯の煙突高き初湯かな  
アカペラの部員勧誘地虫出づ  
さくらさくら風を欲しがる日本丸  
マヨネーズ時計回りにつくしんぼ  
朧夜の大熊猫は戦士めき  
畦に置く百葉箱や麦青む  
傘で突く天守の高さ花菖蒲  
抱へ来る西瓜砲弾かもしれぬ  
沈黙をかき混ぜてゐる団扇風  
江ノ島を傾けてゐる金魚玉  
漁具店の魚拓に並ぶアロハシャツ  
青芝やケーナ奏者に風湧きぬ

◇特別作品◇(抄)

## 神の恋

橋添やよひ

青島  
四句

海幸山幸遊びし磯の葉月潮  
鳥渡る百万年の波状岩  
神話館につづく日向の花野かな  
ポインセチア神話の里の神の恋  
高千穂を靄のぼりゆく草紅葉  
晩稻刈る山ふところの袴谷  
田仕舞の煙より先に火の走り  
穂芒や高千穂峡の空澄みて  
火の山を近みの宿や鴟ひびく  
錦木や肩なだらかに由布ヶ岳

# 風土独語／神蔵器



満月の右手に大仏殿の鴟尾

中村 洋子

これは私の勝手な想像だが、作者は般若寺で刻を使い過ぎ、バ  
スにも乗りおかれて、一人で奈良坂を下っていたのではなからう  
か。夕日観音の前を過ぎ、北山十八間戸あたりで秋の日はとっふ  
りと暮れてしまった。はるか前方に奈良の街がひらけ、眼下に大  
仏殿の大屋根が山のように見え、若草山も夕闇に包まれている。  
しばらくして、南東の空がほの白く華いで来ると、若草山の南  
の端から思いもかけず満月が昇りはじめた。ひとたびは、夕暮  
の闇に包まれた大仏殿も浮き上り、そして満月が大きく澄明な光  
となるにつれ、右手の大仏殿の鴟尾は月光を得て崇高典雅、黄金  
の威容に輝きはじめたのだ。

東大寺は、治承十年（一一八〇）に平重衡の手により、また永  
禄十年（一五六七）には松永久秀の軍勢によって二度にわたる焼  
き打ちにあった。今、作者が立っているであろう奈良坂は、東大  
寺再建の木材を木津川方面から奈良へ運ぶ人夫たちの掛け声で、  
昼も夜も満ちていたという。

真二つに割つてすだちの万華鏡

工藤ミネ子

すだちは鶉の卵ぐらい。中に十ぐらいの房状の果肉、その房の  
中に一ケずつ種子が入っている。無い房もある。横に真二つに割  
ると、房の横断面が放射状に走り、種子も真半分に切断されるの  
で放射状の模様さまざまな変化が見られる。  
すだちは料理の最後の決め手、主婦にとつても心のアクセント  
である。「すだちの万華鏡」ぐらいのゆとり、夢とロマンが無け  
れば主婦も続けられない。

少年にノックして置く夜食なり

落合 絹代

受験子を持つ母親は大変だ。わが子といつても、大学や高校受  
験生になれば、立派な大人である。私ははじめ、子供の部屋に入  
る時は、たとえ夜食を持って行く時でも必ずノックしてからにす  
るのが、常識の範囲のことだと思っていた。ところが、過日「そ  
れは違う」と友人に言われてしまった。ノックして、後は子供の  
部屋の中へは入らず、ドアの前の廊下に夜食は置いてくるのだと  
いう。

前者であれば、二言三言でもコミュニケーションが生まれ、張  
りつめた緊張もほぐれ、夜食をとった後、あらたな気持でふんば  
りも生まれる。後者はテレビの見過ぎではないか。プライバシー  
は守られても母子の断絶はだんだん大きくなる。

受験は人生の表裏を決める一枚の紙のごときもの。むずかしい  
時期であると思うが、作者は聡明で明るい人、前者のようなあ  
たたかい家庭であると思う。

# 風土集



## 神蔵 器選

加賀藩の百万石の稲の秋 横浜 中村 洋子

夜寒かな 國友鉄砲火薬店

満月の右手に大仏殿の鴟尾

良夜かな ロンドン 行きの深夜便

さざ波す 近江の湖の秋の声 高槻

天高し 言葉ひとつを放り上げ 浅田 光代

法隆寺に電話鳴りをり秋の暮

考へのまなかひにある煙草

伴走の先生の手のねこじやらし

ひとりづつ 顔の消えゆく芒原 東京

蘆の花 芋銭の河童日和かな 柴田 久子

下の山の暮れて上の田鳴子引く

王朝継ぎ紙展

継ぎ紙の箔のにびいろ秋深む

一人づつ 別れて帰る後の月

うしろより声かけられて後の月 秋田 工藤ミネ子

真二つに割りてすだちの万華鏡

息ぎれのあらぬ称名坂の虫

どんぶくを日に吊し売る市日かな

赤まんまみぞそば 肝煎刑死の碑

山の田に背中合はせの案山子かな 大和

灯台まで石路の花咲く岬かな 落合 絹代

少年にノックして置く夜食なり

良夜かな 国宝仏の一書 繰り

静謐や 東京都知事賞の菊

冬近し 重ぬる絹の軽さにも 東京

御苑いま木の実時雨のなかにかな 柿沼 盟子

経櫃の番号不順 秋うらら

蟬丸の塔へ 秋日の遠きかな

一番線のみ ホームや雁渡し

この海をゆく舟ほしき月夜かな